

モーリス・ドニと日本 レオンス・ベネディットと松方コレクション

三菱一号館美術館 開設準備室 学芸員 杉山菜穂子

国立西洋美術館所蔵のモーリス・ドニの作品の大部分は、松方幸次郎が20世紀初頭にフランスにおいて購入・収集したものであると考えられるが、これらドニの作品は、当時松方が購入した西洋美術のコレクションの中でも比較的点数が多い方であり、その収集作業は、松方コレクションの形成において重要な役割を占めている。

本発表は、モーリス・ドニの作品が、1920年代初めに、日本人実業家である松方幸次郎によって購入された経緯とその意義を、当時のリュクサンブール美術館館長のレオンス・ベネディットとの関係において論じる。ドニ、松方、ベネディット三者の交流関係を、サン・ジェルマン・アン・レーのモーリス・ドニ美術館に残されたベネディットからドニ宛の未刊行書簡と、現在はルーヴル美術館の所蔵になるベネディットのアーカイブの一次資料をもとに調査し、松方がドニの作品を多数購入するに至る上で果たしたベネディットの役割を再考するものである。

特に、ベネディットからドニ宛書簡からは、1920年代に、レオンス・ベネディットの紹介によって、ドニと松方、及び他の日本人コレクターが知り合う経緯や、ベネディットの助言と選択に従う形で、松方を含む日本人が作品を購入した経緯が明らかとなる。またベネディットのアーカイブに残された、松方とベネディットの往復書簡及び作品購入に関する書類からは、松方がベネディットの薦めでドニに関心を抱く様子や、ベネディットが松方の代理人として、当時ドニと密接な関係にあったドリユエ画廊を通じてドニ作品の購入を行う経緯と、その購入記録を知ることができる。これらから、国立西洋美術館所蔵のドニ作品の一部について、その購入価格を含めた来歴を明らかにすると同時に、同時代の他の画家の作品との比較におけるこれらのモーリス・ドニ作品の位置づけを考察したい。

これらの調査は、松方コレクションの全容究明の一端を為し、またその形成におけるベネディットの役割を再評価すると同時に、当時のフランス美術界の作品流通のあり方、また、当時の美術界におけるドニの評価や、彼の作品の位置を考える上で重要であると考えられる。松方によるドニ作品の選択と購入は、確かに当時の日本におけるドニ評価と需要に並行するものではあるが、1920年代のフランスにおけるドニの画家としての位置や、ベネディットとドニと密接な関係を考慮しても、これまで考えられている以上に、レオンス・ベネディットの好みと影響力が反映されたものであると思われる。従って、当時のフランス美術界の前衛的な動きに呼応したものではないにせよ、当時の美術界の主流派から影響を受け、それを反映したものとしての松方コレクションのドニ作品の価値を再評価し、さらにそれらが当時の日本で受容された意味を再認識することが可能となる。